

学道一如

発行
小樽双葉高校
生徒会通信
2025年9月16日
第29号

作田くん広島平和スタディツアーに参加 自分らしく平和を発信したい

作田悠月くん(3-1)は8月4日〜7日に広島平和スタディツアー(コープさっぽろ主催)に参加した。充実した内容で、見聞したことを発信し、平和作りに貢献したいと願っている。作田くんは次のように語った。

◆ ◆ ◆

事前に顔合わせしていたメンバーで1日目、新千歳空港に集



合し、広島へ飛んだ(右写真)。2日目、平和記念公園で千羽鶴を奉納し、公園内を散策、見



学した。その後、ジャーナリストの方から放射能を含む黒い雨と、その被害についての講話を聞いた。次に「虹のひろば」の交流会に参加した。ダンスパフォーマンスや被団協の方のお話を高校生が絵画にした作品の解説、被爆ピアノによる合唱など多彩なプログラムだった。

遺品が語る原爆の恐ろしさ

その後、原爆資料館を見学した。熱線で溶けた様々なもの、衣服などの遺品(写真左)を見たり、残された手記を読んだ。言葉が出なかった。「戦争とは何か」を考えずにはいられなかった。音声ガイドを聴いていると、当時のことにより鮮明に記憶

を辿ることができた。

広島県知事の言葉が響いた

3日目は平和記念式典に参列した。原爆投下の8時15分に黙祷を捧げ、石破首相らの宣言を聞いた。中でも広島県知事が「核による抑止は概念でしかない。物理的に核の使用は暴力であるから、言葉により平和を築きあげる必要がある」と語り、国連のグテーレス事務総長代理も「武力ではなく話し合いにより平和を築き上げよう」と呼びかけていたことが印象に残った。

被爆者から貴重な体験聞く

次に被爆者の末政サダ子さん



(92歳、写真右)による講話を聞いた。末政さんは11歳で被爆していた時だった。その日の鮮明な記憶を絵にして語ってくれた(写真下)。末政さんは踊りが好きで、戦後明るく前向きな生き方をされてきたが、被爆体験については周囲の圧力があり、長い間、語ることはできなかった。語るようになってからの変化を尋ねたところ、「感情を出すことができて、気持ちよくなった」と話してくれた。



ワークショップで考えた「平和×ダンス」で発信

その後、平和活動家で被爆3世の住岡健太さんのワークショップに参加した(写真下)。平和作りのために何ができるのかを念頭に、「平和×○○」を考えた。○○には何を入れてもよい。自分は「平和×ダンス」、ダンスは世界の人と繋がる共通の表現だから、ダンスを通して平和を伝えていきたい。いつか動画にして世界に発信できたらと願っている。

宮島観光

次に宮島を訪れた。宮島に鹿

がたくさんいることに驚いた。厳島神社などを見ることもできた。

平和のメッセージを灯籠で

夕食後は灯籠流しに参加した。紙に平和のメッセージを書き、灯籠の形にして流した。原爆ドームの上

はドローンが飛び、アート作品を見ることもできた。

感想・抱負を述べて解散

4日目は空港までのバスの中で参加者一人一人が感想と抱負を述べた。僕はこのスタディツアーに参加したことで新しい責任が生まれたと思う。それは聞いた責任、発信する責任があるということ。自分らしく、自分なりの形で平和を世界に広めたいと思っている。

◆ ◆ ◆

作田くんは先日、札幌市の地下歩で開催された報告会(上写真)に参加し、真に3分間のプレゼンをした。いかに知ってもらえるかに腐心したという。10月1日の全校集会での報告は一層充実したものになるよう、準備するつもりだ。

